

Title	調査目標及び経過
Sub Title	Aim and process of field research
Author	有賀, 喜左衛門(Ariga, Kizaemon)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1962
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.1 (1962.) ,p.38- 43
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村落における氏神祭祀組織と政治・経済構造との関連： 長野県諏訪市湖南南真志野：中間報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000001-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

調査目標及び経過

Aim and Process of Field Research

有賀喜左衛門

Kizaemon Ariga

昭和 33 年本学の農業経済学、日本史学及び社会学の有志によって上記諏訪市^{ミナト}湖南地区^{ミナト}南真志野^{ミナト}を中心とする共同調査が発足し、其後慶応義塾大学村落調査会⁽¹⁾を結成して、本年に及び、なお今後も共同調査を続行の予定であるが、今回その一部を整理して中間報告として発表することになった。それぞれの専門分野が異なる学部または学科に属するとはいえ、共同研究の目標から見て、今回本塾大学院社会学研究科紀要に一括して発表させてもらうことになった。

われわれの共同研究の目標は表題にあげた通りである。端的に言えば、日本の政治構造における祭政一致は制度の表面からはすでに古い時代に失われたにもかかわらず、祭と政との内面的関係は少なくとも第二次大戦までは存続して来た。戦後の改革によって、この内面的関係も徹底的に砕かれたように見えたが、最近憲法や宗教法人の改正運動の中にくすぶり初めたことは注目してよいであろう。これを反動だときめつけることは容易であるが、こうしたくすぶりはくすぶるだけの理由があるからではなからうか。祭と政との内面的関係は単に中央の政治構造の内に存在したのか、あるいはそれは基層の社会構造を含めて、全体社会の

⁽¹⁾ 会員として小池基之、常盤政治、高山隆三、田中明、中井信彦、高橋正彦、志水正司、米山桂三、向井鉄一、矢崎武夫、佐原六郎、有賀喜左衛門、横山寧夫、佐野勝男、仲康、宇野善康、山岸健、宮家準、米地実、川鍋大、大淵英雄その他がいる。

中に括っていたのであるか、そしてそれらは戦後どのように変化しつつあるのであるかを、われわれは村落社会を中心にして検討して見たいと思うのである。

こんな大きな問題はもちろん一つの村落を対象にただけではわかるものではないが、従来上層階級ないしエリートをのみ対象として来た研究方法が十分であったわけではなく、その基層に深く括っているものをつかまえることによって補足されなければ、真の姿をつかむことはできないと考えている。われわれが村落や村人を対象とするのは、それで十分と思うのではないが、日本人の精神史に関する一般の解明のために少くとも新しい角度の資料を提供しようと思うからである。

この点から見ると村落生活の要点の一つとして氏神信仰をとり上げることは、これに農村人の心情が痛烈に反映していた歴史から見て重要だと思われる。もちろん現在ではもはやそれは強いものとはいわれませんが、現在に至る歴史的過程と現在において急激に関心を失いつつある変化とを問題にしなければならぬと思う。過去における村人をめぐる政治的・経済的・社会的条件のきびしさは村人をして家を守り、村落に依存する念願を強めずにはいられなかった。村人の生活を守るはずの神々も決して一つではなかったとしても、村人の信仰が凝集する大きな目標の一つとして村落の氏神鎮守があったことは、これをめぐって村落の生

活がくりひろげられたことでもあった。しかし村人は彼等の生活の中で種々の関心を持っていたのであるから、もちろん村落の氏神鎮守にのみ集中したのではなかった。日常的には村落生活は簡単に一つにまとまっていたのではなくて、家々の各種の互助組織があって、もっと小さい利害の一致やその対立があり、それが各種の派閥ないしは共同の家を単位として成立せしめていた。また村外に対する種々の関心や関係も少からず生じていたとしても、村においては家の神や先祖を守護神とし、同族神や講中の神仏を仲間の守り本尊と見て家の共同組織と結びつくものも多かったから、信仰の面でも複雑な構造を持っていたが、村落生活の年中行事の主要な時期や彼等自身や彼等の家や村落にとって切実な時期には氏神鎮守に必ず参拝し祈願することを欠くことはできなかった。

今日一般に神仏に対する信仰が弱められ、村落の氏神鎮守はもとより、如上の諸信仰は全休として著しく低調となるか、廃されてしまったものも少くない。これは神仏に国家や村落や家の運命を托した心情が敗戦によって無惨にも裏切られたという事実から来た点もたしかにあらうが、それと共に最近十年間において生じた政治的・経済的・社会的条件の改変は農村生活にかつて見なかった程のやすらぎを与えたことにむしろ大きな原因があるのではなからうか。それはこの期間に物心ついた若い人々において特にこれらの信仰がうすれて来ていることによって知ることができる。しかしそれは果して全然消えてしまったのであろうか私にはまだ断言できない。過去において村人の危機感の克服が単に神仏への信仰にたよったのではないとしても、信仰によらねばならぬ部分が大きかったことは社会的諸条件を見ればうなずかれる。これに比し今日の社会的諸条件は農家の危機感のある程度緩和した。農業経営そのものが安泰となったのではもちろんないが、それを補完する手段は、不十分とはいえ、いくつか生じた。政治的制度的変革を外にしても兼業、通勤、離村、農業技術の進歩、各種の共同化ないし協業、各種の保険、保障制度等はそれである。これらは裏をかえせば農業経営の危機に対する対応の新しい仕方

でもあるが、この仕方は戦前と比べて見れば大きく変化した。これを農家が危機感としてどの程度に意識するかどうかに問題があるのであって、このことが彼らの政治に対する態度を決定して行く要因ともなっている点を深く注意しなければならない。

このような見方がわれわれの研究目標を決定したのである。そこでわれわれは日本のどの村落を調査対象として選んでも、この問題に当然つきあたらねばならぬことも明かであるが、われわれがまず諏訪市の一村落から出発しようとしたことにはもちろん理由はあった。旧官幣大社としての諏訪神社を中心とする信仰領域は、長い時代の経過の中で、領主家ないし杜家の政治的領域の変化が生じたにもかかわらず、これと比較的多く合致して変化して来た。あえて諏訪をとらなくても、この傾向は日本における地域社会の氏神信仰と政治との関係を大きく規定していたので、諏訪もその一例として見ることはできる。しかしそれにもかかわらず諏訪においてはその発祥の伝承を古代に持つ領主神氏（諏訪氏）が近代の廃藩置県に至る迄ほぼ連続して統治したので、その政治勢力の隆替による諏訪神社信仰の直接の領域の変化を示しながら、長い時代に亘って祭祀組織と同じ領主家との結びつきを緊密に維持して来た点で一つの典型として見てよい。その上明治における新しい行政区としての諏訪郡がこれをうけついで、その上に諏訪神社の祭祀組織を持ったことは一層興味が深い。あだかもこの時全国のあらゆる神社は伊勢神宮を頂点として官幣社、国幣社、県社、郷社、村社、無格社の階層構造に編入され、天皇制国家の政治構造の精神的基盤となることが要請された⁽¹⁾。諏訪大社が諏訪郡民を氏子として、その奉斎による大祭の行われる慣習⁽²⁾が明治初年に再編されたのは諏訪藩領がほぼ新しい諏訪郡に重なっていたことにもよるのであろうが、政治と氏神祭祀との密接な関連がつねに各時代の新しい条件によって更新されつつ引きつがれて来たことに最も

(1) 諏訪神社は明治4年国幣中社、明治29年官幣中社に列せられ、ついで大正5年官幣大社に昇格した。

(2) 御頭奉仕の篇に説明しておいた。

重要な根拠がある。したがって一つの領域にける政治・経済構造と密接に結びついた氏神信仰とは何であるかを明かにすることは日本人の精神史の重要な問題であり、これを一国の政治の表層においてとらえることはもちろん大切であるが、その意味は基層の村落生活に至る迄深く滲透していたかどうかを知ることを欠いてはならないとわれわれは思っている。このことはわれわれが諏訪の一村落をまずえらんだ理由であった。

従来氏神や諏訪神社の研究は少ないし、優れた成果も見られるが、私達はこれとはやや角度を異にして、村落生活を通してこれを見ようと考えている。これはこれらの村落の支配者である領主や其の後の政府の政治構造やそれと結びつく大きな領域の総鎮守の信仰体系との関係を無視するのではなく、むしろそれとの関連において村落を問題にしたいのである。しかしこの大きな問題に対して私達の研究は今その中途にあるに過ぎない。しかしすでに獲た資料の整理や問題点の検討も必要であるし、今迄多大の御助力を忝うした現地の方々には私達の研究の成果をお知らせする事が当然の義務でもあるので、整理できた部分を一部中間報告として発表することにした。私達の研究が中途にあることはもちろんとしても、本紀要の限られたページに盛るのは一部でしかないという事情にも制約されて、この報告は担当各班の研究を一部分しかのせることができないので、全体としては整然とした体系を示すことができないのは非常に残念である。特に地元の方々にとってこのような形式はおそらく御満足になれないと推察するが、これらは近い将来において大きくまとめる時に解決するつもりであるから了承して頂きたい。

今度発表する論文各篇は全体の中でどういう意味を持つかを簡単に説明しておきたい。

われわれの問題の立て方としては二つの点がある。一は村落内部においてその氏神鎮守はどういう社会的意味を持つかということであり、それが村落内部の政治・経済構造といかなる関連を持って来たかを明かにすることである。氏神鎮守の司祭としての氏子総代は現在の南真志野においては一年毎の交替制をとっているの、司祭者の位

置は政治・経済における権力構造とはすでに切りはなされている。こういうことは現在多くの村落に見られることであるから不思議ではないが、こういう事態に変化して来た過程においては、一般に村落の政治・経済における有力家が司祭者の座にすわっていたという事実が多く見られた。南真志野においては、このことは早く崩れていたように見える。それは江戸時代から農民階層の分化が比較的著しかったので、特出した有力家が成立しなかったことによるものようであるし、明治以降養蚕・製糸業の発展により、製糸家の比較的有力なものも出現したが、彼等は村落自治の面で表面的な活動を見せておらなかったことにもよるであろう。反面広大な入会山の地元村としてこの村は大きな権益を持っており、その役職としての山惣代は村落自治の有力者として存在したが、彼等は必ずしも経済的な有力者ではなかったというこの村における特殊な事情もあったので、この村においてわれわれの問題を簡単に解決させることはできない。しかし村の鎮守の営繕に対する寄附においては各時期の家々の社会的権威を示す意識が強く働いていたことを見逃がすわけには行かない。個々の家の権威や社会的地位がこういう事柄にのみ示されていたのでないが、それを示す顕著な事柄の一つとして社殿や仏寺の営繕があったという歴史上の慣習と結びつけて考えておく必要がある。それは村落の氏神鎮守が村落の団結の表象としての意味を持っていたことと深い関係があるからである。したがってわれわれが村落の政治・経済構造の分析を江戸時代から行うことが当面の課題であり、それ以後の各時期の政治的变化の下に村落構造をつかむことが必要であった。村落の行政区としての意味はそれが直ちに村落の政治ではないが、行政区の役職をめぐって古来村落の政治的動きが生じたことは多く見られたし、南真志野の如く諸村落の広大な入会山野の地元村として、大きな権益を所有した場合に、その山惣代をめぐって村落の政治的動きが生じたことも当然である。こういう政治的動きは村落内部の社会構造に規定されたことは当然であるが、家の創設に関する共同関係(マキ・同族団)や其他の宗教的・経済

的社会的条件によって生じた複雑な共同関係（以上を一括して家連合と称しておく）がそれに深く関係していたのであるから、村落生活を形造る基礎的な家連合の隆替の歴史的経過を辿って刻明に分析して行く仕事が必要である。

各篇の叙述は一見してはまちまちであるのは資料整理が各班によって一斉に進捗していないからであって、問題意識に差異があるためではない。部分的に問題を限って叙述したものもあり、統計的に一般的な表現を行ったものもあり、不揃であるのはこの中間報告においてはやむを得ない。大きな問題を全体として簡単に解説するのであるなら別であるが、そういうことを目的とするのでないので、不揃の中にどういう問題意識を持つかをむしろ見て頂きたい。

中井、高橋、志水は江戸時代から明治初期までの政治・経済・社会構造などを主として担当した。本紀要にはその一部として中井、高橋の「江戸時代における地縁と族縁」とがよせられた。これは家連合としてのマキと南真志野を四分する小部落組織としての沢とを扱っている。共に村落構造の重要な要素として今日でも存在しており、それらは江戸時代に成立したものと見られ、江戸時代におけるそれらの社会的意義を明かにしているばかりではなく、南真志野における特殊な性格を示したことは後代の南真志野の性格を知る上に大きな寄与をしている。もちろんこの班の取上げた問題は政治構造や農業等広汎に亘っているが、有賀たちの発表する二篇に呼応する意味もあって、この題目がえらばれた。

次に小池、常盤、高山、田中は主として明治時代以後の経済の展開を担当した。諏訪が養蚕、蚕種、製糸の一大中心地として成長した過程は日本の近代史の中で重要な地位を持つが、その渦中で南真志野はどんな役割を持ったかは本研究の焦点の一つである。高山はその一部として「明治時代の農業と製糸業の発展」をよせている。これは単に南真志野に限らず、北真志野を含めて、湖南村の資料を援用しつつ、農業構造を地盤とする比較的小規模の製糸業がこの村において発展した特殊な過程を解明している。そしてこれらの小企業の

資金や共同揚返し機構を明かにしているが、経営構造の全面的分析は後日にゆずった。大正期以後の変化や有力化した製糸家の村における政治的地位もすべて重要な問題を含んでいるが、後日にゆずった。なお附言しなければならぬことは、この班の仕事の一部は常盤の「農業経済の再生産構造と農民層の分解」として、戦後の農業に関する研究が三田学会雑誌 53 巻 7 号に発表されていることである。

さらに有賀、仲、山岸、横山、米山、向井、矢崎は主として明治時代以後隆替した諸々の家連合（マキ、講、小組合等）や家連合以外の諸集団をすべて発掘して、それが銀行、産業組合、農業協同組合などの設立によって再編されたり、消滅したりした歴史的過程を探ぐり、小池たちの産組・農協研究に合流する意図を持ち、また行政区下部組織としての区（耕地）、沢（旧組）、隣組（十戸組、四十戸組）、隣家などの組織が各種の家連合や諸集団と関連しつつ歴史的変化を見せた過程について分析を行うことを担当した。その一部として山岸の「隣組、旧組、隣家」と、有賀、仲の「マキと祝神講」とを本紀要によせている。

そして佐原、佐野、宇野、宮家は現在の農民意識の調査を担当し、その一部を宇野の「農民の思考様式に関する資料」として本紀要によせている。戦後の南真志野は諏訪市に編入され、名実共にその近郊村としての性格を強め、通勤者は激増し、ほとんどの農家が兼業化したか、兼業を欲しているという状況となった条件の下で、信仰・祭祀、家、農業、新しい諸集団、例えば農協婦人団体、青年会などに対する村人の考え方の変化を探ぐって見たものの一部である。

二は村落を包む全体社会と村落との関係において村落の氏神鎮守が持っていた社会的意味をつかむことである。封建体制の封建的分国における総氏神（総鎮守）と村落の氏神鎮守との関係を探ぐり、明治維新によって成立した天皇制国家における伊勢神宮を頂点とする神社体制の内部に、この関係がどのように組みこまれて来たかという問題があげられる。氏神信仰は天皇制政治に支持されつつも、資本主義の発展や西洋文化の輸入・同化

と共にその地盤を次第に弱めて来た過程を考察して、全体として氏神鎮守の基本的性格を見たい。従来は古代における氏神鎮守の始源的性格を追求することにこの問題の焦点がおかれたが、長い時代に亘って存続して来たものを単に始源的性格によって説明することはできないし、始源的性格の確定は困難であるから、この追求は別の方法によらなければならない。もっと 確実な 資料によって、その変化の過程を辿るなら、そこに氏神信仰の持つ基本的な性格が各時代の政治的・経済的・社会的条件の変化に伴って、いろいろな姿で露呈されるのを見ることができよう。この方が方法的には確実であると思われる。それ故現在の時点において、氏神信仰が全く影をひそめたか否かを見ることも、氏神信仰の基本的性格を明かにするには大切な資料となる。

村落内部における家連合は個々の家の生活を補完するために従来はある程度の封鎖性を固持しなければならなかった。家連合の複雑な重積体としての村落も同様の性格を持ち、政治に対しても、他の村落に対しても自衛集団として立たなければならぬ半面を示していた。政治権力が村落を支配することはいつの時代でも見られたとしても、いかなる手段によってそれは遂行されたかによって、村落把握の仕方は当然ちがった。例えば封建制によるか、資本制によるかというようなことである。封建制による把握が強力であればあるほど、村落をかえて小さな自衛集団にかためたともいえる。資本制は逆にこれをこわす方向に働いたといつてよいだろう。この転換が簡単に行われたというのではない。それは今でも進行中であろう。日本の資本制も漸次その内容を変化させて来た。こういう変化は行政区劃の何度かの変更や産業組合、農業会から農業協同組合への変化などの大きな系統機関の設置にもあらわれ、村落内部の統合を外部の政治力や経済力に借りる現象はもちろん跡を断たないとしても、いくつが生じて、変化して来た副業の小組合はこの枠からはみ出た運営や取引をすることも多少は可能であったし、離村、通勤、出稼などはますます増加して、家の生活や家連合を大きく変らせた。ダムの建設や河

川、用水路の改修、耕地整理などは政府や県の補助によってかなり進展し、旱魃や水害による村落の対立も著しく減少した。公権を介して入会山の分割も村落単位に進行した事実もある。村落はそれ自身の小さな生活地盤の中に完全に閉ぢこめることは江戸時代においてすらなかったとしても、今や甚しく広い生活地盤を要求している限り、村落の団結も昔日の如く渾然たるものでもないし、それは非常に複雑な要素から成立している。別の言葉でいへば到る所で分裂をはじめている。そして村落という団結が現実はどうなるかという問題も提出してよい時期に来ているように見える。現在村落の団結を成立させているように見える条件は何であろうか。村落の氏神鎮守は過去において村落の団結の表象として、強く作用していたことを知るなら、今日の氏神鎮守に村落の団結がどの程度に示されているかどうかの問題にされなければならない。

このことは単に一村の氏神鎮守のみにある問題ではなく、諏訪の場合を見るなら、諏訪郡民を氏子として来た諏訪大社に関しても見られるのであって、あだかも今年に迫った御柱祭にしても、また毎年の御頭奉仕にしても、戦後崇敬、参拝のゆらいだ今日、奉仕の仕方もかなり変化しているように思われる。現在これらの奉仕の慣習の存続している根拠も追求したいと思っている重要な事柄であるが、ここでは結論をひかえたい。この問題は大きくすればさらに伊勢神宮と国民的結合の関係にも問題がひろがることはいうまでもない。

これらの祭祀組織については、有賀と黒崎(本調査客員、北海道学芸大講師)とが一応担当したが、各時代の政治や経済との関連については結局全員によって解明されることになっている。この一部を有賀、黒崎の「諏訪大社御頭奉仕資料抄(1)」として発表している。しかしこれは主として昭和21年の御頭奉仕(湖南村・中洲村)に関するものであって、諏訪大社の御頭が中世からすでに極めて大規模に、しかも最も重要な祭典であったことから見ると、江戸時代から明治時代に推移すると共にはるかに簡略化された祭典の資料を示した所で、その九牛の一毛だにも足らぬもので

あるが、われわれの研究目標の小さな一露頭として見て頂ければ有難い。

本研究は私費の外に、昭和 34 年有賀及び中井の名義で本塾学事振興資金Bをうけ、また昭和 35, 36 年有賀、佐原等社会学のメンバーによって、「村落構造と農民意識の変化」の題目により、文部省科学研究費（総合研究）をうけた。これらは本共同研究の一部をなすものである。

本調査はその初め昭和 33 年に当時在村した医師笠原卓爾氏の御紹介を得て前湖南支所長藤森伊三郎氏、現湖南支所長桑野正文氏、南真志野区長関利弘氏、副区長藤森好恵氏の御尽力により開始することができた。その年は宿泊も桑野氏の龍雲寺を提供して頂いた。調査の続行されるに従って広く村の方々に御援助を得ることになり、昭和 35 年と 36 年とは全戸調

査(約 210 戸)を行ったので、すべての村の人々に多かれ少かれいろいろの御援助を頂くことになった。毎年の区長副区長には特にお世話になったし、上島佐吾吉氏、原輝美氏等の長老にも多大の御尽力を賜った。その他御名前をあげなければならぬ人々が余りに多すぎるので困るが、ここでは失礼ではあるが省略のお許しをお願いして、実に多くの人々から懇切な御援助を賜ったことをここで心からお礼申し上げたく思っている。また北真志野区に対してもお礼を申上げる。この間われわれが不注意で犯した失礼をおゆるしして頂きたいとも思っている。今後もしばらく調査を続けたいので、それについてもこの紙上でお願いしておきたい。なおわれわれの調査に協力してくれた大学院の学生諸君、さらに佐原ゼミ、小池ゼミ、有賀ゼミ及び国史学専攻の学生諸君にも心からのお礼を申しておく。